

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2019年
4月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk-kobe.org/>

発行責任者
司祭 小南 晃

印刷所
文明堂印刷所

「BAWAL ANG NAKASIMANGOT」

司祭 ヨシユア 長田 吉史



毎年、フィリピンワークキャンプに出かけると交通大渋滞に出くわします。マニラの空港から宿泊先まで僅か37kmしかありませんが、到着まで

に車で3時間以上も時間を要します。フィリピンでは、中央分離帯は守られていても車線はあまり関係ないように見え、仮に3車線であればそこに3台以上の車が並びながら少しずつ前に進んでいます。さらには、信号が殆どありません。それでも運転手たちは、車線変更や右折・左折を自由に行なっています。どんなところでも、どんなに僅かなところでもそれを自由に行なっているのです。それは、フィリピンの人々の精神が関係しているようです。どれほど自分が急いでいても、そしてどれほど道が大渋滞していても、自分の前方で曲がりた

人がいれば曲がらせてあげようとする、フィリピンの人々はお互いにそうやってゆずり・ゆずられる関係を大切にしているようなのです。私たちは、まもなく今年のエースターを迎えようとしています。その日の前に、主イエスのご復活されたのはどういふ意味があるのかを探すことあると思います。この世界には、たくさん人の憎しみや悲しみがあふれかえっています。フィリピンの人々が大切にしている、お互いにゆずり合う関係の中にも主イエスのご復活の一つの意味を見出せるのかもしれない。しかし、仮に見出せたとしても、それが最終的なゴールではありません。聖パウロがフィリピの信徒への手紙3・12以下で語っているように、仮にご復活の一つの意味を見つけても、なおその道の途上段階であるということ。聖パウロは、キリストを復活させら

れた神様の力を知ること、将来に期待して、神様の救いの完成という『賞』を目指して走っていることを私たちにも投げかけています。そしてそのためには、キリストの苦難と死に与ることなしには実現しないこと主張しています。でも彼が、フィリピの信徒への手紙3・8以下で語っている直接的な相手は『律法から生じる自分の義』によって「自分たちはすでに復活に与っている」と考えていたのです。しかしその『律法から生じる自分の義』とは、人が律法を行うことによつて実現されるから、その意味では「わたしの義」「わたしが作り出す義」になってしまっています。ということは、救いの保証を自分自身のわざに見出すことにもなり、そこでは神様を自分の道具にしてしまっているということになります。そこで聖パウロはどのような人に対して、自分で自分の救いを完成させることはできない、『キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義』、それは神様から、神様との正しい関係を与えられる以外にはあり得ないと強調しつつ、先のように神様の救いの完成という『賞』を目指して走ることを今年の大齋節第5主日の使徒

書の箇所を通して投げかけているのです。

では、私たちがどのような神様の救いの完成という『賞』を目指して走ることが求められているのでしょうか。それは、フィリピンの人々のお互いにゆずり合う精神もその一つですが、今年のフィリピンワークキャンプの中で教えてくださった、フィリピン中央教区のディクシー・C・タクロバオー主教の「BAWAL ANG NAKASIMANGOT」という言葉にその一つが示されているように考えます。これは、私たち一人ひとりの中に神様がおられるということを知り、その応答として私たちがキリスト者としての責任と一致を果たすために仕えることを楽しみ、いつも笑顔でいることのように。私たちのそれぞれがあらゆる環境の中に置かれていても、その「BAWAL ANG NAKASIMANGOT」という言葉の意味を少しずつでも養い、広げていく、その目標を目指して走り続けていくことを今年のイエスターを前に改めて心に刻んでおきたいものであります。

（広島復活教会牧師・
呉信愛教会管理牧師）